

「この自由を生きて」（ガラテヤ 5:2～6、13～26）

2019. 5. 26 川越キリスト教会・丸山 勉

【聖書】ガラテヤの信徒への手紙 5 章 2～6、13～26 節

ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。割礼を受ける人すべてに、もう一度はっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、“霊”により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食しているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりするのはやめましょう。

序. キリスト教信仰とは「出会い」

世の中に沢山の宗教と言われるものがあり、「キリスト教」もその一つだとされます。そして、宗教と言うものはとどもつまり同じところを目指すものなのだから、どのような宗教でも良いではないかという言い方がされます。そうでしょうか。私はそうは思いません。他の宗教のことは詳しく知りませんが、私はキリスト教信仰に入るといえるのは、他の宗教を研究、また比較検討して、並列して自分で選ぶというものでは本質的に無いと思います。思想や哲学であれば、つまり学問であれば客観的に自分で良いところ取りをしてもいいと思いますが、「出会い」というのは、比較検討出来ないものですよね。「出会ってしまった」というその事実が、キリスト教信仰にとってはとても重要なことではないかと思います。「ガラテヤの信徒への手紙」を書いたパウロも、キリストに「出会った人」、いや、「出会わされた人」ですよね。

1. 自由にされるということ

そして、パウロもという人物は、イエス様に出会わされて、皆さんご承知のとおり、生き方が鮮やかに変わりました。キリスト者たちを迫害した者が変えられ、伝道者となり、むしろ今、逆に迫害を受けているのです。一つの単純な言い方をするならば、神様は人を全く変革する力をお持ちの方なのだ、ということです。どんな人もです。人間は諦めてしまうことがあるかもしれないが、神様は諦めない。人を造り変える力をお持ちの方！

パウロは変えられてどうなったのか。権力者になったのでしょうか？誰からも羨ましがられる生活を手に入れたのでしょうか？——そうではありません。彼は「自由」な者になったのです。そして、その自由を今身に受けて、これこそがずっと前から渴望していたもの、求めていたものであったのだ、と思ったに違いないと思う。5章13節でこう言っています。「兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召し出されたのです」と。

2. 「律法」依存症？

それまでのパウロ自身は、自分は自由に生きていたと思っていた。自分のまっとうな意思や生き方でクリスチャンたちを迫害してきていたと思っていた。けれども、その実、心の深みでは彼は不自由であったのです。「平安」がなかった、と言っても良い。そのことに気付かされたのは、キリストに出会って後のことなのではないかと思う。人間というものは、自由な存在のようでいて、自分でも気が付かない内に何かに捕えられて、執着して生きているものです。「アルコール依存症」とか「薬物依存症」であるならば私たちは普段の生活を中断して、そこから抜け出るためにハッキリとした指導を受けなければいけません。けれども厄介なのは、そのように外に現われないけれども、自分が何かにかんじがらめにされているという、内的な依存（症）です。パウロの場合は「律法依存症」だったと言えるのかも知れません。

3. 「割礼」規定を乗り越えたパウロ

パウロは熱心なユダヤ教徒でした。彼はファリサイ派の中の一員で、律法に対する忠実度、それを熱心に守ると言う点で、誰にも引けを取らない存在でした。言い換えれば、彼にとって「律法」が全てだったのです。律法への100%の依存度や執着を持って、イエス・キリストの教会とクリスチャンを迫害していた。そのパウロが今、ガラテヤの教会の人々（これはユダヤ人ではないクリスチャンの者たちの教会）に言います。5:4節をご覧ください。「**律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。**」と。これが変革したパウロの確信です。彼は、律法によって神様に義（良し）とされるという生き方、それへの執着を捨てた、いえ、捨てさせられた。キリストの恵みというものが、もっともっと大きいからです。

そしてここで話題になっているのは「割礼」ということです。パウロはそのことについてもキッパリ言います。2～3節。「わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります。割礼を受ける人すべてに、もう一度はっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。」

割礼という習慣は、私たち日本人はよく理解できない点がありますが、今でもこの習慣を重んじているところがあります。それは衛生上の施しとも言われますが、より大きな理由は宗教的な意味合いのようです。何せ、旧約聖書の律法にハッキリと規定が書いてあります。ですから、パウロは、イエス様と出会ってその規定を乗り越えてしまったのです！乗り越えた根拠をパウロは、他の書簡ですが、「ローマの信徒への手紙」の4章で語ります。(4:9~10)。

「では、この幸いは、割礼を受けた者だけに与えられるのですか。それとも、割礼のない者にも及びますか。わたしたちは言います。「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも割礼を受ける前ですか。アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼の印を受けたのです。」

神様はアブラハムを信仰の父とされましたが、それは彼が割礼を受ける前に神様が一方的に、恵みによって、その信じる心を義とされたのだと語ります。だから、異邦人にまずユダヤ人のようにまず割礼を施さねばならないということは最早意味を失っている、そうしてしまうことは、あのキリストの恵み、十字架の恵みを無視することになるとパウロは言う訳です。そして、このことは、パウロ以前にあのステファノが、既に、キリストによってもう新たな時代が到来したということを確認していました。ステファノが最高法院に引かれていった時に彼がこう語っていたことが使徒言行録6章に残されています。「私たちは彼がこう言っていることを聞いています。『あのナザレのイエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を変えるだろう』」(6:14)。パウロは、このステファノを受け入れられず、なき者にすることに賛成していた人です。その彼が今、その同じことをガラテヤやローマの教会の人々に語っているとは、神様のなさることは本当に人間のわざを超えていますね。

4. 「隣人を自分のように愛しなさい」

先週もお話しましたが、人々は「宗教」やその組織を「飼い馴らしのメカニズム」と考えてしまいがちです。平たく言えば権力機構です。信者に「これは神様のみこころなのだから」と言えば容易に従い、一つに束めることが出来る。だから自爆テロのような愚かなことが起こるのだ、特に一神教は極端で排他的だ、そこには「自由」がない、と。そのような言葉はよく耳にするのではないのでしょうか。

しかし、そうではないのです！キリストに出会うとは、キリストに捕えられて生きるとは不自由になることではないのです。むしろ逆です。自由に、自発的に、人々を排除するのではなく、その中に入り、「愛」に生きることなのだ、実はそれこそが、律法が本来言っていること、神様のみこころなのだ、ということパウロは語っています。5:13~14をお読みします。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。」

旧約聖書の律法の数、それは 613 あると言われますが、その精神はこのことに尽きるのだと言うことも出来ます。「隣人を自分のように愛しなさい」。何とシンプルで、美しい響きの言葉でしょうか。けれども、決して生易しい、簡単なことではないと思います。当たり前の言葉ではないように思うのです。誰が「私は愛に満ちた、律法全体の心に適った生き方をしている者だ」と言えるでしょうか？

パウロは、無責任にこのことを語ってはいません。一面人間の力では無理だと言っているのです。パウロは自分自身を見つめながら語っていると思います。16 節。「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。」彼のこれまでの生き方の中になかったことは「霊の導きに従って」生きることだったのです。それまでは自己確信、或いは、律法を守らなければ神様に捨てられるという思い込みに従って生きてきた。その時には、彼の心の深みには平安はなかったと思います。今、パウロは言うのです。キリスト者とは、「霊」、＝聖霊の導きに従って歩む者だ、つまり自分の欲望や執着にしがみつかないで、それを手放す生き方をするのだと。そして、聖霊は、私たちの人生に、自ずと「実」を結ばせてくれると言うのです。「御霊の実」です。どんな実を結ばせてくれるのか、22 節以下でこう言っています。—「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。」と。キリストが与えて下さる新しい掟です。これは教科書的な徳目ではないと思うのです。きっとパウロは、これらの言葉を書くことが出来ている自分に驚きながら、神様に感謝しながら書いているように思えてなりません。この中で「喜び」は自分の中に与えられた感情と言えらると思いますが、その他の“愛”や“平和”などはみんな他者との関係性の言葉ではないでしょうか。—「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。」キリスト教信仰とは、いつも他者と「共に」なのです。独りよがりの信仰はどこかゆがんでいると言って良いのだと思います。とても自分自身を探られます。

5. 「よきサマリヤ人」と私たち

私は今日の箇所から、あの「よきサマリヤ人」のたとえ話を思い起しました。良くご存知のイエス様が語られたあのたとえ話です（ルカ 10:25～37）。少しそのこととお話しして終わりたいと思いますが、あのたとえ話で面白いと思うのは、旧約聖書の専門家や宗教家が、傷ついた旅人一人をも手助け出来ない、全く無力な存在である、ということです。律法においては死体に触れてはならないとありますし、祭司は神様のための自分の「おつとめ」の方を優先したのだという言い訳にもなり得るかもしれません。「律法」の限界です。イエス様は、結構皮肉を込めて話されているのかもしれませんがね。

追いはぎに襲われて半殺しにあっている人を助けることが出来た人は、偶然そこにいたサマリヤ人でした。彼はユダヤ人から蔑まれ、それこそヘイトスピーチ（嫌な言葉）を受けていたでしょうから、倒れているユダヤ人を助ける義理など何もないのです。むしろそれこそ道の向こう側を歩いて行っても何も言われないうでしょう。けれども彼は「憐れに思った」のです。彼は差別されていたサマリヤ人として、人の弱さや痛みが分かるのです。「憐れに思う」。ここにキリストの心があります。誰をも排除しない心があります。生まれつきの人間の心は、不都合

な存在がいれば、良くても「無視」、攻撃的になれば「報復」を考えます。人間の心は、例えば「忠臣蔵」などもそうですが、復讐劇を好むのです。まあ、スッキリしますから。けれども、キリストを信じて生きる生き方と言うのは、その意味では必ずしもスッキリした生き方ではありません。しかし、「自由」な生き方へと導かれます。このたとえ話のサマリア人は、この旅人を介抱し、馬に乗せ、安全な宿屋に運び、賃金を払い、まだ足りなければ後で払うと言っています。お金にも執着していません。喜んで捧げています。人はこれを愚かな行為と言うのでしょうか？ここにあるのは「愛」です。ただ「愛」です。単純な「愛」。そして、それは私たちにキリストがして下さったことなのではないでしょうか？「十字架」の愚かさが、愚かしいほどの「愛」が、ここに見えています。

結. 聖霊の導きのもと、実が結ばれる

このお方に導かれる時に、私たちはここで言われている「御霊の実」を結ばせて頂けるのだと思います。これは間違っ**て**はいけないと思うのですが、ある意味戦い**です**。自分の中の「肉の思い」と戦って、キリストに捕えられた者として、赦された者として、その方にしっかりと「根を降ろす」ということです。そして、「御霊の実」、「実」ですから、土いじりをする人は良く分かると思いますが、「実」は自分の頑張りではなく、自然の力を受けて、時が巡ると実が結ぶわけ**です**。そしてそれを疑っていたら種を蒔けませんよね。私たちは、イエス様によって、神様の畑に一人ひとりが蒔か**れて**いるのです。それは御言葉に養われる「良い土地」**です**。神様が下さる上からの光と水を受けて、お互い「隣り人」となって生きて行きま**しょう**！最後に、ガラテヤ 5:24~25 をお読み**しま**す。

「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったので**す**。わたしたちは、霊の導きに従って生きて**いる**なら、霊の導きに従ってまた前進**しま**しょう。」

アーメン！